

いま、吉田秀雄の言葉



## 吉田秀雄の言葉

吉田秀雄の言葉がいつも熱いのは

広告の青春特有の気魄が

ほとばしっているからだ

やむにやまれぬ

怒りにも似た

現状打破と成長への意欲が

渦巻いているからだ

吉田秀雄の言葉が厳しいのは

せっぱつまった危機感に

つねにさいなまれているからだ

今のままではいけない

一步前に踏み出さねば

生きて行けぬという

焦りにも似た

変革と前進の意志が

こみ上げているからだ

吉田秀雄の言葉が時として優しいのは

自らの若き日の苦難の体験があるからだ

人間への慈愛と思いやり

ヒューマンリレーションの大切さ

これらがビジネスのなににも代えがたい

成功の秘訣であることを

知っていたからだ

岡田芳郎

戦争が終わった。その時「これからだ」と、立ち上がった男がいた。吉田秀雄である。

その一生は、まさに「広告界の近代化」に捧げられたと言っても過言ではない。

その先見と情熱、そして献身と挑戦を残された言葉で辿ってみよう。

私は先ず、日本の広告界の進歩向上を考える電通  
ということを考えて居ります。

1947年(昭和22)6月23日、電通第4代社長に就任。  
その挨拶で。なにがなんでも日本の広告界全体を  
引き上げるのだという気概が見て取れる。

広告は、社会の紐帯であり

常に時代の先端を切る前衛的な文化活動である。

1948年(昭和23)、広告クリエイティブの技術向上を目指して創設した広告電通賞。その第1回贈賞式で。

願わくば諸君、

生き残って先駆者となりたまえ。

「民衆放送」創立に向けて。

電波は国民共有の財産だ。

1957年(昭和32)3月。それだけに公共に対して責任  
を持たねばならない。

広告は社会進化のシンボルであり、

広告は文化進展のバロメーターである。

1957年(昭和32)7月1日。電通の創立記念日に。



広告ビジネスは、

平和の使徒たる職分を果たさなければならぬ。

1958年(昭和33)4月。アジア広告会議開催を提案。  
広告界の国際化にも尽力した。

平和な時代とは、  
すなわち広告の時代であります。

1960年(昭和35)1月。元旦の社長訓示。

冒険のないところに進歩はない。

常識以上の非常識こそ勝利の道である。

1960年(昭和35)7月1日。電通の創立60周年記念式典。

広告は、科学であり、芸術である。

1961年(昭和36)12月。はたして、この考え方が日本の広告界のなかで成長してきたかどうか。  
37年こそ、これまでの体質を思い切って改善しなくてはならない。

謙讓、礼儀、親切。

1948年(昭和23)1月1日。吉田社長の第一声。

広告という無限の沃野を人間の力だけで、  
開拓していくことが出来る

ということを考えてみると。

自分の仕事の意義の深さに大きな喜びと、  
無限の誇りを禁じ得ないではないか。

1956年(昭和31)1月。元旦社長訓示。

近代企業は、その社会に

奉仕するのでなければ生存を許されぬ。

1959年(昭和34)9月、「吉田秀雄をねぎらう会」の  
世話人への礼状。

常に精神と神経に、  
適当な休養を。

1959年(昭和34)10月。夜更かしを重ねるのは、広告  
の仕事のむずかしさ、大切さを知らぬ者。  
不摂生により、病に倒れるのでは、お取引先に申し  
わけのしようもありません。



# 個人プレーは百害あって一利なし。

1959年(昭和34)10月。広告業が正しく成長するために「銘記すべき五項目」を提示。その中で、「仕事に応じて直ちに社内の諸才能を糾合編成し、常に有機的な組織活動を」とある。

こと広告に關しては、誰人にも負けない  
知識、才能、経験、技術を身に付け、  
これを実行する見識と自信と氣迫を  
持たなければなりません。  
これは、公共に對する責務であります。

1960年(昭和35)1月。元旦社長訓示。

広告は、最も優れた頭脳と、

最も熱心な研究と勉強とをもつてする

非常に難しい仕事。

1956年(昭和31)1月。元旦社長訓示。

広告は、豊かな社会をつくる。

社会主義下でも広告はなくてはならぬ。  
『この人 吉田秀雄』より

進まないことは、

すなわち退くことの第一歩である。

1960年(昭和35)2月。貿易の自由化を目前に、  
現状打開、現状変化を強く訴える。

この会議は儀式ではない。

1960年(昭和35)5月。毎月行われる全体部長会議。  
マンネリズムを排し、AE制度の完成のためにも  
新鮮、澁刺とした人材、才能の登用を行うことを  
宣言。

みながやるということとは

みながやらないということになる。

1960年(昭和35)5月。すべてを具体的な問題にして、具体的に責任の分担を決める。分担した者は全力をあげてこれを成就する。

最初に命令を受けたものが、  
責任を負わなければならない。

1960年（昭和35）5月。命令を受けて、ほかの誰かに  
命令。それで自分の役割がすむわけではない。



お中元は七月一日に、

お歳暮は十二月一日に。

1960年(昭和35)12月。一挙手一投足、月並みであってはならない。お中元、お歳暮も世間並みでは効果は乏しい。

いかなる仕事・作業にも  
デッドラインをしけ。

1961年(昭和36)1月。いやしくも組織活動、チーム活動というからには、計画ならびに策戦がなければならぬ。チームの各メンバーは、正確に活動し、作業速度、作業期間の決定は厳格に守られねばならぬ。

自社の商品に

ケチをつけるな。

1961年(昭和36)1月。われわれの仕事は、人間の知恵、才能、才覚、技能だけがすべてだ。いいかえれば、人間そのものだ。わが社の者への非難、悪口は、自分の商品にケチをつけることになる。

# シンパを作れ。

1961年(昭和36)8月。電通の仕事は無形の財を  
売る仕事。それだけに、先方が電通に善意をもっ  
ているのと悪意をもっているのでは、大変な違いが  
出てくる。

# ブームを創れ。

1961年(昭和36)10月。ブームを創り、ブームに乗れ。  
失敗を恐れるな。失敗と思ったら直ちに回れ右。  
倍の力でまき返せ。…と続く。

広告の仕事は、

社会万般と深い関係を持つものだ。

1961年(昭和36)12月。広告界だけの視野で仕事をすれば、スケールが小さくなる。  
視野を広め、行動半径を高く広くすることを心掛けねばならない。

お互いがよくなつていくために。

1961年(昭和36)12月。自分も同僚も商品である。  
お互いが啓発しあい、欠点を埋めあっていく。

想像と思想がなければ  
事業は成立しない。

後年、正力松太郎を賞賛し、光永星郎を偲ぶ。  
『この人 吉田秀雄』より。



不可能を可能とする所に新しい生活がある。

我々の想像に絶するものが

現れてくるに違いない。

1962年(昭和37)6月。山陽放送開局のあいさつで、  
衛星放送の到来を予見。

最期の言葉

二倍の努力、二倍の研究、二倍の勉強。

1962年(昭和37)10月。広告界は、貿易自由化という未曾有の革命期に直面している。  
もはや、広告科学、広告頭脳の時代である。

## 最期の言葉

私の命を差し上げるから、

1962年(昭和37)10月。一日も早く本社は屋の完成を成し遂げるための努力をお願いしたい。療養中であった吉田社長は、4か月ぶりに事業予算会議に出席。会場は感動に包まれ、出席者全員による「社長静養懇請」の手紙が採択された。

◎出典

『電通100年史』 電通2001年

『この人 吉田秀雄』 永井龍男著・文藝春秋 1987年

『第4代吉田秀雄社長 年譜・訓示・説示』 電通・社内研修資料